



ぼくらは世界とつな がっている

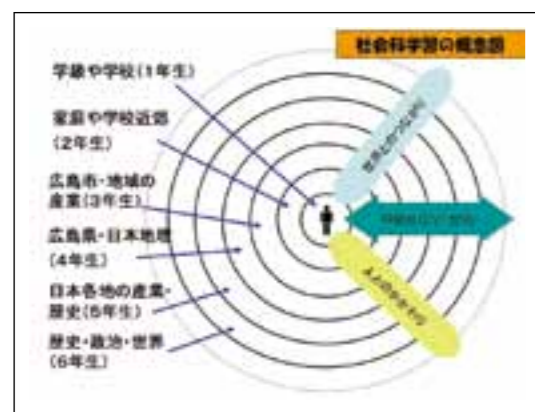
—体験、発見、貢献、なぎさじゃけん—

なぎさ公園小学校
教諭 ピーターソン 美香

同心円状に広がる社会科学習

本校の社会科学は、1・2年生が「不思議～村の?都市の?」、3～6年生が「社会」という名前で授業を行っています。「不思議～村の?都市の?」は、生活科を社会科学分野と理科分野に分け、子どもたちの知的好奇心を大切にしたい体験重視の授業であり、本校オリジナルの科目です。

教科の学習内容は、自分という存在を確認しながら、学年の発達段階に合わせて、学級や学校といった身近な社会的現象から始まり、家庭、学校周辺、地域、市、県、国、世界へと同心円状に広がっていくようになっています。言い換えると、身の周りで不思議だなと思ったことから、地球規模で疑問に思うことまで、一つ一つの社会的現象を段階的に学んでいくということです。



この学習の中で、特に大切にしていることが、二つあります。一つは、「世界とのつながり」です。子どもたちの学習における視点が、単に外へ広がっていくだけではなく、時には身近な社会へ戻ったり、身の周りの様子を振り返ったり、時には、飛び越えて先へ行ってみたいと行き来しな

がら、常に自分と世界とのつながりを確認できるようにしています。

もう一つは、「人とかかわり」です。友だち、家族、教師、職員、講師など、出来るだけ多くの人びと直接かかわりながら活動できるよう心掛けています。



世界とつながる学び

1年生の「ともだちのわ」という授業では、普段行っている手と手を握り合う握手に加えて、人差し指をつなぎ合ったり、

手首を握り合ったりという握手もします。これらは、外国で古くから行われていたものです。「ボディートーク～世界の身ぶり辞典」Desmond Morris著
子どもたちは様々な握手を知った後、お互いに相談してその中から選び、「心が通じる、友だちになるおまじない」として握手をします。

ここでは、友だちの輪が広がる喜びを感じ、コミュニケーションの手段やあいさつの大切さを学ぶと同時に、多様な握手をすることで世界の文化を体験するのです。そして、「自分たちが普段行っていることを、世界のあちこちでも行っているんだ。」「やり方が違うところもある!」「どうしてこうするんだろう?」という

ように自分と世界とをつなげた視点で気付きや思考を深めていきます。

この他にも、1年生の「通学じょうず」の授業では道路標識から世界を見てみたい、2年生の「手紙の不思議」という郵便の授業では世界の郵便ポストを見てみたいします。特に本校にはネイティブの教員がいますし、広島在住の外国の方を講師としてお招きしたりしていますので、「あの先生の国ではどうかな?」と子どもたちは自然発生的に考え始めます。子どもたちの世界が広がる瞬間です。

また、日本の伝統行事や歴史に触れることも大切にしています。1年生の「豆まきの不思議」という授業では、手作りの袴を着たり、1合杵を使って鬼に向かって豆を投げたりします。日頃、何気なく行っていたことが、「あっ、そういう成り立ちだったんだ!」と気づく瞬間です。



人とかかわる学び

多種多様な人びとが共存する世の中では、社会的な知識だけではなく、相手のことを考えて人に接する心や積極的な行動力も必要です。したがって単元によ

っては、講師としてお招きして教えていただいたり、現地に行ってお話を伺ったりします。こうして人と出会い、直接かかわることで、その人の思いや、その人とのつながりを感じることができるからです。



それから、言うまでもないことですが、子どもたち同士のかかわりも大事にしています。人と人が共に支え合って生活する環境の中には、考えや意見が異なってもお互いに力を合わせたり、話し合ったりして物事を決定したり、解決策を見つかる場面がたくさんあるからです。

具体的には、クラスや学年でペアやグループとなって一緒に活動したり、学年を越えて学習したことを紹介合ったりします。もちろん初めは相手の気持ちに気付かず、自分の思いが先走ってしまったり、目の前の事で必死になったりして、活動が上手いかず、本来の目標を達成するのに時間がかかることもあります。しかし、こうした体験を何度も繰り返していくことで経験を積んでいき、自分の意見を言いつつ、相手の意見を聞いたり、あるいは

譲ったりできるようになるのです。

伸縮自在な学び

こうしていくうちに、距離にしたら遠い世界ですが、身近に感じたり、親しみをおぼえたり、共通点を見つけたりして、自然と「伸縮自在な地域」が形成されるのです。そうすると、あらゆる学習において、自ら世界的な広い視野で目の前にある課題を比較したり、検討したりしながら、物事を見通せるようになるでしょう。

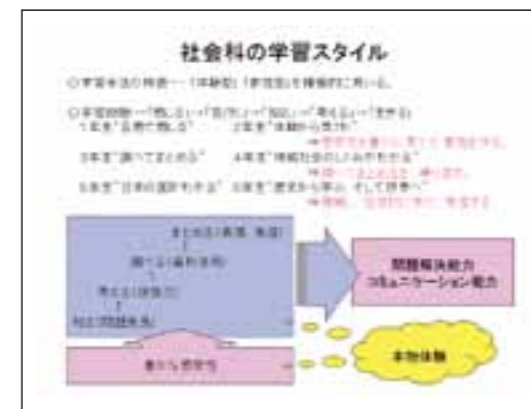
また、実際に「行ってみたい!」「やってみよう!」というように、自分だけではなく異なる世界への興味・関心、さらには地球市民社会への参加・貢献のきっかけとなっていくに違いありません。

バランスのとれた学び

さて、社会科学の学習スタイルは、特に低・中学年において体験型・参加型を積極的に用いるのが特徴です。そして、子どもたちが豊かに学べるように、本物に触れる機会をできるだけたくさん設けるようにしています。また、「感じる」→「気付く」→「知る」→「考える」→「生きる」という一連のつながりを意識し、学年ごとに学習スタイルを変化させ、バランスのとれた学びとなるようカリキュラムを構成しています。

例えば1年生の「世界の家」や「世界の味」についての授業は、五感を通して世界を学ぶ体験型の授業です。最初に子どもたちは家や味の材料となるものを触り、匂いを嗅ぎ、じっくり見ます。「自分だ

ったら何に使おうかな?」「他の人は、何に使うのかな?」「他の国では、何に使われているのかな?」と様々な角度から自由に考えた後、住宅の多様性やバラエティに富んだ料理を学ぶのです。



今後の学びにむけて

これまで、1年生から6年生まで全ての学年において、記憶力重視の知識獲得ではなく、本物体験型・参加型を重視した学びを行うプロセスの中で知識を獲得したり、あるいは社会的な能力を身に付けたりすることを目指してきました。

今後は、特に高学年でそういった知識や能力を前提とし、各々の力をいつどこでどう活かしたらよいか、どう発信していくのかといったノウハウも身に付けられる学習を展開していきたいと思っています。

今年度は、その第一歩として、自分の力を確かめるための、社会科学「なぎさ検定」を始めました。授業で学んだことを復習できるとともに、レベルアップを目標に意欲的に取り組めるようにしています。

これからも、子どもたちに求められる学びの獲得を目指して取り組んでいきます。